

都市の読解とそのおもな手がかかり (その6)

比較都市論 (その6)

6 城下町以外の都市を考える (長野・浦和・岐阜)

- ・ 門前町由来の長野、宿場町由来の浦和、もともとは城下町であったが江戸時代になって商業都市として栄えた岐阜、それぞれの都市が持っている空間構造と近代化のプロセス、近代化にあたって各都市が抱えていた課題を考える、同時にその課題をどのように克服してきたかを考える

長野

- ・ 善光寺という芯と参道による構成
- ・ 参道が次第に南に延びる
- ・ 善光寺平の扇状地にながめに都市ができる
- ・ 地としての小河川群とその上に作られた門前町、そこに近代が重なる
- ・ 善光寺の創建は644年と伝わる
- ・ 善光寺は天台宗と浄土宗の寺院群によって運営されている。庶民信仰の寺
- ・ 平安後期には成立していた門前町、1000年の歴史を有する
- ・ 門前町は北国街道の宿場町でもあった
- ・ プロトタイプを有する城下町とは全く異なる漸進的成長を遂げた都市
- ・ その意味では欧州の都市に近い
- ・ 裾花川の扇状地に立地した善光寺
- ・ 裾花川の河川改修(17世紀)で西に流路を変え、扇状部分を都市とした
- ・ 扇状地は扇状が北西、扇端が南東であるが、善光寺は正確に南面している
- ・ 軸と斜面の「ずれ」が長野の都市の個性を生んでいる
- ・ 現在の仁王門のあたりに寛文の如来堂があった。1707年に北側の現在地に移る
- ・ かつての如来堂周辺がもっともグリッドに近く、南へ下るほどグリッドから遠ざかる
- ・ 南へ都市が拡大していった証拠
- ・ 善光寺の参道も南へいくほど少しずつ屈曲する
- ・ 明快な参道と蛇行する裏道、裾花川の数多くの支川(鐘鑄川・中沢川・北八幡川・南八幡川・古川)が北西から南東へ向けて流れている。現在は支川の多くは蓋かけされている
- ・ 1876年、筑摩県庁舎(松本)が焼失し、筑摩県のうち信濃国の部分が統合され、長野に県庁が来る
- ・ 1888年、長野駅創設
- ・ 参道の北西側に公共施設、南東側に商店街、花街ができる
- ・ 権堂のアーケード街の東は鶴賀遊郭
- ・ 動かない県庁舎と移転を繰り返す市庁舎、1965年に現在地に。
- ・ 参道と県庁舎―市庁舎の軸が十文字をなす：昭和通り

浦和

- ・ 線的な宿場町をいかに面として広げるか、が浦和の課題
- ・ 近代の施設はすべて街道筋から入った裏側に作られた
- ・ 中山道の小規模な宿場町、江戸の前から集落は存在した
- ・ 舌状大地をのぼったところに調(つき)神社、ここから平坦になる
- ・ 中山道では蕨宿、大宮宿、鴻巣宿、日光道中には草加宿、越谷宿、いずれも浦和よりも大きい
- ・ 城下町としては岩槻、川越
- ・ 現在の埼玉県は藩領(川越藩・岩槻藩・忍藩・前橋藩ほか)、旗本領、天領がほぼ1/3ずつだった
- ・ 岩槻県・忍県・浦和県が統合され(旧)埼玉県が成立(1871.11)、県庁は岩槻に置かれることに
- ・ 西部は入間県のち熊谷県の一部になる。入間県と(旧)埼玉県と熊谷県の武蔵国部分が再度統合され現在の埼玉県ができた(1871.12)

- ・なぜ浦和に県庁がおかれたか：当初は大宮県(1869.2)のち浦和県(1869.9)、埼玉県(1879.11)
- ・おそらく東京に近かったことと、県庁舎の適地があったことによる
- ・浦和の近代施設は中山道沿いにいかに顔を出すか、という課題を持っていた
- ・1883年、浦和駅開設、台地の東端、停車場道(のち郵便局通り、現さくら草通り)が中山道まで造られる
- ・県庁舎から中山道まで、表門通り(現県庁通り)が造られる。のち駅のほうへ延伸
- ・中山道の一本西の裏側に公共施設が立地、東の一本裏側は飲食店街に
- ・稲荷大神社→師範学校→女子師範→埼玉会館・県立図書館
- ・郡役所→市民会館
- ・師範学校→埼玉大学→市役所→区役所
- ・御殿山→裁判所→常盤公園
- ・かつての師範学校跡地に埼玉会館(1966)
- ・中山道バイパス(現国道17号、1933)
- ・駅前の再開発(浦和コルソ、1981)が停車場通りを分断

岐阜

- ・岐阜と加納の二核都市
- ・駅が両者の中間にできたため、いずれの都市にとっても裏からアプローチすることになる
- ・特に岐阜は北から発展してきた都市のため、まったくの背後からの近代化を迫られることになった
- ・1539年、斎藤道三により建設された城下町、同年、伊奈波神社が現在地に移される
- ・中世は長良川の川湊だったと考えられる
- ・長良川中流域にひろがる小さな扇状地に立地
- ・1567年に織田信長が占拠し、都市改造
- ・究明は井口(いのくち)、信長により岐阜と改名
- ・当初は長良川に向かう東西軸の都市：金華山に向かう本町筋、タテ型の城下町
- ・周囲を惣構と土居が囲む：内町
- ・のちに南へ展開、南北軸が主となる、したがって南半はヨコ型となる
- ・1601年、廃城、大半の機能は新しく作られた加納城下町へ移された
- ・以降、商業町として継続、1619年に尾張藩に編入
- ・独立した商業都市として発展する
- ・都市の発展は南へ向かう
- ・加納には中山道が通っており、これといかにつながりも近世の課題
- ・1871年、岐阜県の成立
- ・1874年、県庁舎が司町に建設される、既成市街地の南端
- ・県庁周辺に師範学校、中学校、女学校、警察署、裁判所、監獄、病院が集中、市庁舎(1888、1919に現在地に移転)も
- ・1887年、駅開設(当初は加納停車場と称した)
- ・1888年、少し西に移動して岐阜駅開設、旧市街から駅に向かう八間道(のち神田町通り、現長良橋通り)
- ・同じ頃、金津遊郭が旧市街地と駅の間で移動、柳ヶ瀬通りが通り道として発展する
- ・1913年、岐阜駅が現在地に移動
- ・南進する市街地をいかに受け止めるか
- ・戦災復興によって、金華橋通り(かつての忠節線、平和通り)と岐阜東西通りで十文字に都市を開く
- ・同時に市街地の西への拡大をいかに受け止めるか
- ・1997年、岐阜駅の高架化、駅前の再開発